

白虎湯

(白虎加人参湯、白虎加桂枝湯、白虎加黄連湯)

手い時は脈は洪大に浮増ひする、
汗は少くとも微弱、地散、沈滞、
心あり

原典

白虎湯

- 傷寒、脈浮滑、白虎湯之を主る。(傷寒論太陽病下篇)
- 陽の合病、腹滿、身重く、以って轉則し難く口不仁にして面垢き、汗を發すれば則ち譫語甚だしく、之を下せば則ち額上に汗を生じ、手足逆冷す。若し自汗出ずる者も白虎湯之を主る。(傷寒論陽明病篇)
- 傷寒、脈滑にして、厥する者は、裏に熱あるなり、白虎湯之を主る。(傷寒論厥陰病篇)

太陽陽明少陰

① 白虎湯は表熱のみに口渴が甚しくしかも裏証の無いものを目録としている。白虎加人参湯は白虎湯の比で更に体液が欠乏して液涸と云ふもの
② 白虎加人参湯は悪風と悪寒の無い者で舌苔白く脈浮滑にして心あり、身重く、腹滿、汗を發すれば則ち譫語甚だしく、之を下せば則ち額上に汗を生じ、手足逆冷す。若し自汗出ずる者も白虎湯之を主る。
新陳代謝の盛ん、
虚汗、
心あり

白虎湯加人参湯

- 桂枝湯を服し、多いに汗出でて後、大煩渴解せず、脈洪大の者は白虎加人参湯之を主る。(傷寒論太陽病上篇)
- 傷寒、若しくは吐し、若しくは下して後、七八日解せず、表裏俱に熱し、時々悪風し、大いに渴し、舌上乾燥して煩し、水数升を飲まんと欲する者は、白虎加人参湯之を主る。(傷寒論太陽病下篇)
- 傷寒、大熱無く、口乾いて渴し、心煩し、背微悪寒の者は、白虎加人参湯之を主る。(傷寒論太陽病下篇)
- 傷寒、脈浮、發熱汗無く、渴して水を飲まんと欲し、表証無き者は、白虎加人参湯之を主る。(傷寒論太陽病下篇)
- 陽明病、脈浮にして緊、咽燥き、口苦く、腹滿して喘し、發熱汗出で、悪寒せず、反って悪熱し、身重し。若汗を發すれば則ち躁しく、心煩々として反って譫語す。若し温針を加うれば、必ず枕物、煩燥して、眠るを得ず。若し之を下せば則ち胃中空虚、客氣膈を動かし、心中懊憹、舌上胎の物は梔子豉湯之を主る。若し且つして水を飲まんと欲し、口乾舌燥の者は、白虎加人参湯之を主る。若し渴して水を飲まんと欲し、小便不利の者は猪苓湯これを主る。(傷寒論陽明病篇)
- 太陽の中熱は物是なり。汗出でて悪寒し、身熱して汗す。白虎加人参湯之を主る。(金匱要略瘧濕病)

陽明病、
熱、
心あり、
胃中、
空虚、
客氣膈、
心中懊憹、
舌上胎、
物は梔子豉湯、
若し且つして、
水を飲まんと欲し、
小便不利の者は猪苓湯、
これを主る。

白虎湯加桂枝湯

- 師の日く、陰氣孤絶し、陽氣独り發すれば則ち熱して少氣煩冤し、手足熱して嘔せんと欲す。名付けて瘧瘧と日う。若し但熱して寒せざる者は、邪氣、うちは心に蔵し、外は分肉の間に舍り、人をして肌肉を消鑠せしむ。温瘧はその脈平の如く、身に寒なく、但熱し、骨節疼煩し、時に嘔す。白虎加桂枝湯之を主る。(金匱要略瘧病)

白虎湯加黄連湯

○慢性湿疹に白虎加桂枝湯の桂枝の代わりに黄連を加えた。(大塚敬節経験方)

白虎湯の名前の由来

小青竜湯、大青竜湯の名称はこの二方中に存する麻黄の色青きを以って往古の四神、即ち青竜、白虎、玄武、朱雀の一なる青竜神に擬して命名せられしものにして白虎湯の稱呼は其君薬たる石膏の色白きにより白虎神に、玄武湯(真武湯とも云う)の名は配せる附子の色黒きを以て玄武神に、朱雀湯(十棗湯ともいふ)の稱は、其君薬たる大棗の色赤きにより朱雀神によりて名付けられしなり。(湯本求真、皇漢医学より)
石原明は朱雀を大黄に当てて考えている。

処方構成

石膏15、粳米8、知母5、甘草2、(人参2) (桂枝4) (黄連1.5) g

方意

石膏と知母の二味の薬徴は「大煩渴を治す主薬にして、裏熱を解し、背微悪寒、煩

躁、骨節疼痛を治す。（田畑隆一郎『二味の薬徴』）、

石膏 清熱。知母とともに大渴引飲を治す。

知母 清熱と滋潤。

粳米 石膏の煩渴を治す能に協力しながら胃腸を整え、煩躁を鎮静させる。

甘草 諸薬の働きを調和。

人参 津液を生じ、煩渴を除き、滋潤止渴作用がある。

桂枝 上衝を治す。甘草と組んで桂枝、甘草の組み合わせとなる。

使用目標

新版漢方医学から

百虎加人参湯

（使用目標）

この処方白虎湯に人参を加えたもの。白虎湯の証で体液の減少が激しく、のどの渇きが甚だしく、疲労の状態をきたしたものを治す。急性発熱性疾患では、熱があつて、舌が乾燥し、口渇が甚だしく、脈が大きくて力のあるもの。この際、背に寒気のあることもある。多いに水を飲みたがり、大便は硬く、尿がよく出て、時に発汗がひどく多いこともある。発病後、数日経っても熱が下がらず、のどが渇き、汗が出て、しかも尿もよく出て、ひどく苦しむものに用いる。

（使用疾患）

1. 諸種の急性熱病、感冒、流感、麻疹など
2. 日射病
3. 糖尿病で口渇の激しいもの
4. 皮膚疾患で痒みが強く、熱感のあるもの。皮膚炎、湿疹、乾癬、ストロフルスなど
5. 夜尿症（湯本求真 夜尿症の治療について苓姜朮甘湯と白虎湯の証がある。

診療医典から

白虎湯

（使用目標）本方は、解熱、鎮静、止渴作用があり、身熱、悪熱、煩熱などの熱症状に用いる。この場合の脈は浮滑数または洪大で、口中乾燥、口渇を訴える。身熱、悪熱、煩熱と証する症状は、自覚的に身体的熱感があつて苦しく、通常悪寒を伴わず、他覚的にも病人の皮膚に手を当てると灼熱感がある。

（方意）本方は、知母と石膏が種として清熱に働き、甘草と粳米は調和剤で知母と石膏に協力する。

（使用疾患）感冒、インフルエンザ、マシ、猩紅熱、チフス、日本脳炎などで、高熱、口渇、煩燥のあるもの。日射病、糖尿病、精神病で興奮し、煩渴するもの、痒みの強い湿疹に用いる。

（関連処方）

白虎加人参湯 白虎湯に人参を加えたもので、白虎湯証で高熱のため、体液を消耗して、口渇のはなはだしいものに用いる。

白虎加桂枝湯 白虎湯に桂枝を加えたもので、白虎湯証で表証があり、上衝の気味のあるものに用いる。

大塚敬節著作集より

白虎湯

白虎湯の石膏の量

湿疹に白虎湯、白虎加人参湯、白虎加桂枝湯などがよく効くものがある。特に強調しておきたいことは、白虎湯の石膏の量である。岡田昌春や湯本求真先生がいて

いるように、石膏は量を多く用いないと効がないということである。湯本先生は1日量100~200gを用いることがたびたびであったが、こんな大量でなくとも、1日量30gは用いるがよい。1日量15gを用いて効がなく、30gに増量して奏功した例がある。

湿疹に白虎湯

分泌物が少なく患部が乾燥した湿疹。

口渴にも陰陽虚実がある

口渴があれば実証であると即断するものがある。いわゆる古方派の人達の陥り易い弊害である。この種の人たちは口渴さえあれば何でもかんでも石膏の入った方剤を用いなければならないと思っているが大変な間違いである。高熱があつて口渴の甚だしいものに真武湯や茯苓四逆湯のような附子剤がかなり多い。もし誤つて陰証の口渴に白虎湯を用いると病勢はたちまち悪化し、危篤に陥ることがある。そこで迷う時は真武湯から始めるべきである。

和田東郭

「およそ疫病で大熱、煩渴、譫語などの証があり、熱は火が燃えるようで、渴は焼石に水を注ぐようで、譫語は狂人が語るようで、たいていの医者がこれは白虎湯の証だといひ、或は承氣湯の証だといふ。これはまことに投ぜんのようだが、このような場合に、意外にも真武湯の証がある。」

『医学救弊論』

「三十余歳の男子で或年の十二月に発病、頭痛、発熱、悪寒が甚だしく一医が麻黄湯を与えること日に十余貼に及び、連日之を服したため汗が大いに出て、精力衰え便所に行くこともできなくなった。そこで余に往診を乞うた。脈は浮にして大、舌上は乾燥して煩渴引飲して汗は執々として漏れ止まない。そこで白虎湯の煩渴として診断して之を投ずるに、煩渴はパタと止み精氣急に衰微して日を経ずして死んだ。余が思うに、この患者は発汗過多亡陽の証で真武湯を用うべきであつたのに白虎湯を与え、前医が命を促し、我亦再逆して遂にこれを殺したのである。」
石膏剤の口渴は冷水を好み、附子剤の口渴は熱湯を好むから鑑別になるという説が唱えられているが、これは必ずしも当にはならない。附子剤の証にして冷水や氷塊を好むものが往々にしてある。」

白い舌苔が一面に厚くかかっている場合、口渴があつても石膏剤は用いない

舌に白い白苔があつて口渴のある場合にはその苔が湿っている時はなおさらのこと、乾いていてもうっかり白虎湯のような石膏剤は用いられない。これを与えると食欲不振、悪心などを起こすものがある。これには半夏瀉心湯、黄連瀉心湯の証が多い。胃内停水を証明し、心下膨滿の気味のあるものには、茯苓沢瀉湯、茯苓飲湯を用いる。沢瀉、茯苓、猪苓、茵陳などを用いるべき口渴には小便の不利がつきものである。

熱が強くて口渴甚だしく、脈洪大のものには白虎湯を用いる。

このような場合、悪寒や身体痛があつて自汗のない場合、裏熱があるばかりでなく表熱もあるので大青竜湯で表裏の熱を一緒に解くのである。もし悪寒も身体痛もなく、自汗の出るものは表証がなく裏熱だけであるから白虎湯を用いる。しかし熱が高くて口渴の甚だしいものに附子の証があつて、真武湯を用いなくてはならない時がある。誤つて白虎湯、大承氣湯の如きもので死期を早めてはならない。

尿失禁に白虎湯

白虎湯を尿失禁に用いることは湯本求真先生から聞いたが、この遺尿（尿失禁）は多くは熱病の際に見られるもので、熱病以外の雑病で尿を失禁するものに用いることは稀である。『傷寒論』では腹が張つて、身体が重く、自分で寝返りが困難でうわごとをいひ、尿を失禁するものに白虎湯を用いている。

頑固な盗汗に白虎湯

口渴の甚だしい顔面神経麻痺に白虎湯

口渴の甚だしい乾癬に白虎湯加地黄、当歸、薏苡仁

白虎加人参湯

糖尿病初期に白虎加人参湯

糖尿病の初期で口渴があり体力の旺盛な者に白虎加人参湯、竹葉石膏湯を用いるこ

とがある。しかし、疲労感、腰痛があれば一見強壯に見えても八味丸を用いるべきである。

口渇があって下すべき場合

口舌が乾燥して大渴引飲するものには白虎加人参湯の証が多いが、燥屎があって大渴のものには承気湯頭を選択しなければならない。しかしこれらの証に似て数日間便秘して虚証のものがある。誤ってこれらを承気湯の類で下してはならない。人参、附子の類で温補しなければならない。便秘しているか否かによって虚実を分けるのではなく、脈と腹から判断するのである。

慢性湿疹に白虎加人参湯

乾燥して痒みが強い湿疹に白虎加人参湯

糖尿病

消渴を治すの薬方として古書に記載されたものは百方を超えるほどの多数にのぼる。糖尿病の治療に関しては、これを上消、中消、下消に分類することが便宜である。『趙養葵』によれば上消とは舌上が赤く裂けて大渴引飲するもので、白虎加人参湯の治するところである。筆者は糖尿病にて未だ体力衰えず、洪大、浮滑等の脈状を呈し、腹力衰えず、大渴引飲して、小便また多きものはまず白虎加人参湯を与えるのを常にしている。この際舌は赤く裂けて潤いのないこともあるが、そうではなく、白苔があって乾燥していることもある。この湯にて、口渇、多尿を制し得るのみならず、尿中の糖を現象せしめ、陰萎、憂鬱感等を撃退するにもまた成功した。

白虎加桂枝湯

頭痛に白虎加桂枝湯

逆上して頭痛し、歯の痛むものによい。この方の頭痛の起こる時は脈が洪大であり、口渇を訴え、舌が乾燥する。頭痛は下からつきあげてくるような激しいものである。

日光過敏症に白虎加桂枝湯

乾癬に白虎加桂枝湯

マラリアに白虎加桂枝湯

白虎加黄連湯

蕁麻疹に

目標一蕁麻疹の出ている間は、気が狂うのではないかと思う程ひどく痒い。口渇があって、水をよく飲む。脈は洪大であるものが多いが、必ずしも洪大でなくともよい。痒いところで火が燃えているようだという患者もいる。腹部が軟弱、無力のもの、脈が微弱のもの、下痢しているものなどには用いない。

めまい、耳鳴りに白虎加黄連湯

70歳女性のめまい、耳鳴りに苓桂朮甘湯、柴胡加竜骨牡蠣湯で効果がなく、方証相対している如くにみえて却って悪化する場合にその方剤と逆の処方をするとう奏功することがある。この場合めまいは水毒ではなく、石膏、黄連の主治するところと考え、白虎加黄連湯を投与し、1か月にて全治した。

外陰部痒に白虎加黄連湯

外陰部が痒く、局部が真っ赤になって、あまり搔くので痛みもある、という患者に白虎加黄連湯が著効した。

古典にみる白虎湯の口訣

『方機』

白虎湯

- 白虎湯手足厥冷し、或は悪寒して見ずから汗出でて譫語する者
- 手足厥冷し、胸腹の熱激しき者
- 大いに煩渴し、舌上乾燥し、水数升を飲まんと欲する者

- 大熱なく、心煩し、背に微しく悪寒する者
- 暑病にして汗出で悪寒し、身熱して渴する者
- 胸腹の熱劇しく、或は渴して狂の如き者（本方の内に黄連六分を加う）

白虎加人参湯

○本方の証にして心下痞硬する者は白虎加人参湯之を主る。

白虎加桂枝湯

○瘧疾にして骨節疼煩し、渴して水を飲まんと欲する者は白虎加桂枝湯之を主る。

『類聚方広義』

白虎湯

○大渴引飲し、煩燥する者を治す。

白虎加人参湯

○白虎湯の証にして心下痞硬する者を治す。

白虎加桂枝湯

○白虎湯の証にして上衝の証ある者を治す。当に煩渴衝逆の証あるべし。

『勿誤藥室方函口訣』

白虎湯

○此方は邪熱肌肉の間に散漫して大熱大渴を發し、脈洪大或は渴數なる者を治す。成無已は此方を辛涼、解散、清肅、肌表の劑と云う。肌肉の間に散漫して汗に成らんとし、今ひとつ息出きらぬものを、辛涼を用いて肌肉の分を清肅してやれば冷えて閉まる勢いに發しかけたる汗の出できるようになるなり。例えて言え、糟袋の汗を手にてしめて、絞りきってしまふ道理なり。これ故に白虎湯は承氣湯と表裏の劑にて、同じ陽明の位にて、表裏俱熱と云い、或は三陽合病と云うて、胃実ではなく表に近き方に用いるなり。

白虎加人参湯

○此方は白虎湯の証にして、胃中の津液乏しくなりて、大煩渴を發する者を治す。故に大汗出の後か、誤下の後用ふ。白虎に比すれば少し裏面の藥なり。これを以て表証あれば用ふべからず。

白虎加桂枝湯

○此方は温逆を治す。温は温病の温と同じく悪寒なくして熱するを云ふ。この病、骨節煩疼が目的にて、肌肉の間に散漫する邪が骨節まで迫り、發せずして煩疼する故、辛涼解散の劑に桂枝を加えて、表の力を峻にするなり。他病にても上衝して頭痛など劇しき者に効あり。中風たちにも用ふ。東洋はここに白虎加黄連を与ふと云う。

『椿庭経方弁』

傷寒論中に用いるところの石膏には三義有り。日く發表、日く清熱、日く滋養と。其の方は、則ち青龍なり、白虎なり、竹葉なり。白虎湯の証たる。熱胃中につきて津液を消燥す。但熱は胃中に在りといえども、承氣の実とは異なる。後人、白虎は散漫の邪を治すと云う所以の者は之なり。

松厚一かん膏
甘連石膏湯

吉益東洞出世物語

mini-corner

吉益東洞は、江戸中期に活躍した医師で、当時の日本の医学界に画期的な変化をもたらしたことで知られている。その当時の医学は、中国の金元時代に広く行なわれていたものの日本化されたもので、陰陽五行説を駆使する複雑な理論体系を有していた。東洞の目指したのは、このような空理空論の上にたったものではなく、もっと実地に即した明快な医学理論であった。そして、治療の基本を《傷寒論》に置くべきであるという古方派の立場に到達した。彼の先輩には、名古屋玄医、後藤良山、香川修徳、山脇東洋らがいたが、東洞は、《傷寒論》に徹すべきであるという立場をさらに強化し、それを裏づける理論として《万病一毒説》をうちだした。

彼は、その博学、その明快な論理性にもかかわらず、44才までは京都の裏町の片隅で不遇の生活を送っていたが、ひとたび世に出るや、吉益流医学はたちまち世に拡がり、全国から弟子が殺到するようになった。そして、《類聚方》や《藥徴》など、彼の著した多くの書物は、後世の医師に多大なる影響を与えるようになるのだが、それはさておき、東洞が世に出る糸口となった話を、森立之が《遊相医話》に書いているので紹介す

る。

周助（後の東洞）は、京都のとある裏町に居を構え、人形を造ってわずかに糊口を凌いでいた。今日もまた、創った人形を持って人形問屋に出かけたが、今日は店の中が何となく騒がしく、いつもと様子が違う。〈どうしたのですか〉と尋ねると〈うちのおばあさんが傷寒にかかり、たいへんお悪いのです〉という答え、周助は、〈実は私の家は代々医者で私もそうなのですが、運がなくて人形づくりなどをやっております。今、おばあさんがご病気とお聞きし、しかもそれが傷寒であるならば、ぜひ私に拝見させていただきたい〉と頼んだ。

そこで店のものが主人にその旨を伝えると、主人は、〈日頃廉直な周助のことだ。脈を診るだけならばかまうまい〉と彼を病床に伴った。周助は入念に診察し、〈どなたに診てもらっているのですか〉と尋ねると、主人は〈禁裏附の山脇東洋先生です〉という。〈それならば、まず診立て違いということはありますまい。さりながら、もし薬があれば見せていただきたい〉と、薬を見ていうには、〈いかにも大病ではありますが、治療が法に適っておりますので、もう、じきに快方に向かわれ

るでしょう。ただ、今からは処方の中の石膏を抜いて用いるべきでしょう。もし山脇先生がいらっしゃったら、周助がこのように申しましたとお伝え下さい〉といて帰った。

もとより主人は人形づくりのいうことなどそれほど信用してもしなかつたが、しばらくして東洋が往診に来て、薬籠から薬を取り出し調剤にかかったのに、薬匙を取ったまま、しばらく思索顔でいるのを見るに及び、進み出て、〈これはただ笑い話にお聞き下さい。私の家に入りする人形づくりに周助というものが、それが先ほど云々……〉と、先の話を逐一物語りますと、東洋はハタと膝を打って、〈いや、実にそのことなのです。私も今日一日石膏を用いるべきかやめるべきか、随分迷っていたところでした。その話を聞いたからには、その御意見に随い、今日からは石膏を抜きましよう〉といて調剤を終えた。

結局、このおばあさんはこの処方であつたが、このことがきっかけで東洋は周助の学識の深さ、その腕の確かさを認めて推挙し、この後、吉益東洞の名は日本中に轟きわたることになった。

〔安井広迪〕

臨床報告

白虎加人参湯が奏効した汎発性
湿疹の一症例

雨宮 修二

A Case Report on Generalized Eczema Successfully Treated
with Byakko-ka-ninjin-to

Shuji AMEMIYA

1) M. D., Second Department in Research Institute of Oriental Medicine, Kinki University, 377-2, Onohigashi, Osaka-Sayama-shi, Osaka 589, Japan

Abstract The author treated a 43-year-old woman suffering from generalized eczema with Kampo medicine. During the two months prior to coming to the author's hospital, the patient had been given topical corticosteroids for eruptions with itching in the lower extremities by a local dermatologist. The topical corticosteroids improved her skin lesions, but the effect was temporary. When she stopped using these topical corticosteroids, the eruptions not only recurred, but were larger than before. When she visited this hospital for the first time, exudative erythema and macules were seen over the upper and lower limbs and trunk. The author prescribed Byakko-ka-ninjin-to for her skin lesions. Within two weeks, her erythema and itching had improved, and within four months, her eczema had almost entirely disappeared. One year and seven months later, administration of Kampo was stopped, and there has been no recurrence since she first came for treatment (two years and five months).

Key words: eczema, Byakko-ka-ninjin-to

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 46, 567-571, 1996
(accepted 21 Aug, 1995)

緒言

一般に、皮膚の病気は局所の障害ではあるが、生体全体のなんらかの異常を反映している場合がある。そういう場合、局所の治療だけでは不十分で、生体全体に働きかける治療方が必要となる。漢方治療の特色のひとつはその「全体治療」という側面にあり、皮膚科疾患はその良い適応になる

と思われる。

湿疹は皮膚科外来の約1/3を占めるありふれた疾患だが、その本態や発症機序は明らかでなく、治療に難渋する場合もすくなくない¹⁾。ステロイド剤に反応するが、止めると再発する汎発性湿疹の患者に白虎加人参湯を用いて、良い結果が得られたので報告する。

1) 医, 近畿大学東洋医学研究所第二研究部門, 大阪, 〒589 大阪狭山市大野東377-2
〔1995年8月21日受理〕

臨床経験 白虎湯の加味方が奏効したアトピー性
皮膚炎の一経験例

A Case Report on Atopic Dermatitis Well Treated with
Decoctions of Derivatives of "Byakko-To"

遠田 裕政¹⁾ 岡本 洋明²⁾ 森山 健三²⁾
渋谷 知宣¹⁾ 雨宮 修二¹⁾

Hiromasa ONDA¹⁾ Hiroaki OKAMOTO²⁾ Kenzō MORIYAMA²⁾
Tomonori SHIBUYA¹⁾ Shuji AMEMIYA¹⁾

Abstract A 19-year-old girl with atopic dermatitis was treated by Kampo-medicine. At our outpatient clinic, her skin lesions were especially prominent on her face and cervical region, although noticed also on chest, abdomen, cubital and popliteal regions.

At first, decoctions of Byakko-ka-Ninjin-Tō was prescribed in ordinary quantities of composite materials (crude drugs), and afterwards, the crude drug (Coptis japonica, Makino) was added. To improve facial flush and thirst, quantities of Coptis japonica and Gypsum were gradually increased. After 25 weeks of this therapy, the skin lesions almost disappeared, and afterwards, no remedy was needed at least for more than three years.

The therapeutic mechanism of the skin lesions was briefly discussed from both the stand point of "Cell pathology" and that of "Whole body pathology".

要旨 アトピー性皮膚炎の19歳の少女を漢方で治療した。当科外来での皮膚病変は、胸部、腹部、肘窩部や膝窩部にも認められたが、顔面と頸項部において特に顕著であった。

初めは、白虎加人参湯の煎剤を、それらの成分の通常量のままで処方したが、後に、黄連を追加した。顔面の潮紅と口渇を改善するために、黄連と石膏の量を徐々に増量した。この治療を始めて25週後、皮膚病変はほとんど消失し、以後少なくとも3年間は、何の治療も必要のない状態である。

皮疹の治癒のメカニズムについて、「細胞病理学」の観点と「個体病理学」の観点から、若干の考察を加えた。

緒言

漢方治療の大きな特徴の一つは、その「全体治療」という側面にある。すなわち、一見、全く局

1) 医 2) 薬・鍼, 近畿大学東洋医学研究所, 大阪

1) M. D., 2) Pharmacist/C. A., The Research Institute of Oriental Medicine, Kinki University, Ōsaka

原著 高齢者の口腔乾燥症状に対する
白虎加人参湯の効果

—自覚症状の改善と証との関連性についての解析—

海野 雅浩 長尾 正憲¹⁾ 室賀 昭三²⁾

Effect of Byakko-ka-Ninjin-to on Xerostomia in elderly patients

—Analysis of the relationship between improvement of subjective
symptom and Kampo diagnosis—

Masahiro UMINO Masanori NAGAO¹⁾ Shozo MUROGA²⁾

- 1) D. D. S., Department of Geriatric Dentistry, Faculty of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University, 1-5-45, Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo 113, Japan
- 2) M. D., Practitioner, Onchido Muroga Clinic, Tokyo

The effect of Byakko-ka Ninjin-to on xerostomia in elderly patients and the relationship between the improvement of subjective symptoms and kampo diagnosis were studied. Xerostomia improved in 60 percent of 30 patients treated with Byakko-ka-Ninjin-to. There were significantly more patients who were less advanced in years and with a good constitution in the effective group than in the non-effective group.

Although the occurrence of appetite loss was significantly higher in the non-effective group, there was no significant difference between the groups with respect to the occurrence of constipation, diarrhoea, borborysmus, upper abdominal bloatedness or cold constitution. No significant differences between the groups were shown in the occurrence of oral kampo diagnosis such as bitter taste in the mouth, thirst, stickiness in the mouth, and mucosal dryness.

From these results it is concluded that Byakko-ka-Ninjin-to is effective for elderly patients who are not too advanced in year and who have a good constitution and (*sthenia*).

Key words: Xerostomia, Elderly patients, Byakko-ka-Ninjin-to, Kampo diagnosis

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine); 45, 107-113, 1994
(accepted 27 Dec, 1993)

口腔乾燥症状は唾液量の減少に起因し、その原因には加齢による唾液腺萎縮、向精神薬、循環作働薬等の薬物、シュグレン症候群などがある¹⁾。唾液は食物の消化、食物と口腔内諸組織間

との緩衝作用、舌運動の円滑化、嚥下時の食物の流動化に大きな役割を果たしているため、義歯装着の高齢者では唾液の潤滑作用の意義は大きい。とりわけ加齢による唾液分泌能の低下が進行する

1) 歯, 東京医科歯科大学歯学部高齢者歯科学講座, 東京, 〒113 東京都文京区湯島1-5-45

2) 医, 温知堂室賀医院, 東京

[1993年12月27日受理]

高齢者の乾燥症状に対する白虎加人参湯の治療効果

山内 康平^{a)}三木 知博^{b)}^{a)}島根医科大学第三内科教室, ^{b)}日原共在病院内科

緒言

健康人でも脱水症状になると生理的に口渴を感じるが、一般に口腔乾燥症は2つに大別される。口渴とか煩渴引飲で表わされる激しい“のどの乾き”は冷たい水分を多量に欲する状態を言い、高血糖や高浸透圧などが関与し、尿崩症に代表される。もう1つは口乾と略して表わされる状態で、向精神薬、抗パーキンソン剤、抗ヒスタミン剤、アトロピンや類似鎮痙剤、利尿剤やアンギオテンシンなどによるものと、実際に唾液や粘液分泌の低下によるものがある。一般に高齢化するに伴い唾液や粘液分泌は生理的に低下することが知られているが、シェーグレン症候群のように病的状態によるものも存在する。後者にはプロムヘキシシン(ピソルボン)、メチルシステイン(チスタニン、ゼオチン)フェルピテンやパロチン等が試みられるが、西洋医学的に満足すべき薬剤は開発されていない。今回、広く高齢者に頻発する口渴を対象とし和漢薬：白虎加人参湯の臨床効果を検討した。

対象と方法

動脈硬化症、高血圧症、脳卒中後遺症を背景疾患とする高齢者30例(67~90歳)、平均年齢78.33±6.17歳を対象とした。その構成は女性20例(69~90歳)、平均年齢78.45±5.93歳。男性10例(67~90歳)、平均年齢78.10±6.61歳であった。方法としては白虎加人参湯(ツムラエキス剤9g/日)を投与した前後で、ガム試験(客観的指標)および口渴感(主観的指標)を中心に検討した。また、高齢者が多いので血圧や脈拍数の変化に注意し、検査指標として末梢血算、白血球分類、血沈、GOT、GPT、Na、K、Cl、Ca、総蛋白、蛋白分画、IgG、IgA、IgM、CH₅₀、RAT、ANFなどを測定した。前後の変化はpaired T検定を用いて分析した。ガム試験はチューインガムを咬み、10分間に分泌した唾液を重量法で測定し、その値をmlで表わした。また、口渴は②強くあり、①あり、①なしで分類し点数化し統計学的処理をした。

*693 出雲市塩冶町89-1

結果

口渴に関しては、女性20例では投与前に強くあり(5例)、あり(12例)、なし(3例)であり、男性では強くあり(1例)、あり(7例)なし(1例)であった。したがって全体30例では口渴強度(6例)、あり(19例)、なし(5例)であったが、白虎加人参湯投与後は口渴強度例はなくなり、口渴ありが14例(女性9例、男性5例)と減少し、口渴なしが16例(女性11例、男性5例)と増加した。2段階改善は女性例の3例に認め、強い口渴を訴えていたのが、投薬後は口渴を感じなくなった。その3例の唾液分泌量はガム試験で4→15 ml, 4→8 ml, 9→11 mlと増加を認めた。口渴が強い→あり、あり→なしの1段階改善は11例(女性7例、男性4例)にみられ、両方合わせた改善率は女性50%、男性40%、全体では30例中14例(46.6%)であった。口渴著明を2点、口渴ありを1点、口渴感なしを0点と点数化した統計処理によると、女性群20例は平均±S.D.が投与前1.1±0.64から投与後0.45±0.51となり($p<0.01$)、男性群10例は0.9±0.57から0.5±0.53となり($p<0.05$)、全体では1.03±0.61から0.46±0.51となり($p<0.001$)、推計学的に有意な改善であった(Table I)。ガム試験による唾液分泌量は、女性群20例では投与前に平均±S.D.(S.E.)が10.05±5.61(1.25)から投与後に13.35±5.08(1.13) mlと増加を認め推計学的にも0.1%の危険率で有意な改善であった。男性群は投与前に12.1±5.50(1.74)から投与後に16.7±9.73(3.07) mlとなったが、例数が10例でバラツキが大きく推計学的有意には至らなかった。しかし、全体30例では平均±S.D.が白虎加人参湯投与前後が10.73±5.57から14.47±6.99 mlと増加を示し、 $p<0.001$ と有意な増加であった(Fig. 1)。高齢者に白虎加人参湯を投与した影響をみるべく種々の検査項目を測定したが、いずれにおいても有意な変動は認めなかった。また、最高血圧、最低血圧および脈拍数においても明らかな変動はみられなかった。

Journal of Medical and Pharmaceutical Society for WAKAN-YAKU 6, 274-275, 1989

Table I Clinical effect of Byakko-ka-ninjin-to against thirsty mouth.

	(0) 口渴なし		(1) 口渴あり		(2) 強い口渴あり	
	投与前	投与後	投与前	投与後	投与前	投与後
女性20例中	3	→11例	12	→9例	5	→0例
男性10例中	2	→5例	7	→5例	1	→0例
合計30例中	5	→16例	19	→14例	6	→0例
女性	改善なし 7例		1段階改善 7例		2段階改善 3例	
男性	4例		4例		0例	
合計	11例		11例		3例	
	女性改善率50%		男性改善率40%		女性の著効 4→15 ml 3例 4→8 ml ガム試験 9→11 ml	
	女性20例		男性10例		合計30例	
投与前	1.1 ± 0.62 (0.64)		0.9 ± 0.57 (0.54)		1.03 ± 0.61 (0.60)	
投与後	0.45 ± 0.497 (0.510)		0.5 ± 0.53 (0.50)		0.46 ± 0.51 (0.50)	

有意差検定

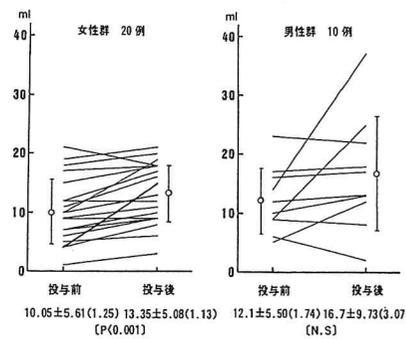
($p<0.001$)($p<0.05$)($p<0.001$)

Fig. 1 Changes of Salivary secretion by Byakko-ka-ninjin-to.

考察と結論

白虎加人参湯に関しては、これまで向精神薬に伴う口渴に対して改善効果があると報告されている。¹⁻³⁾鹿井ら¹⁾は東洋医学の最古典、後漢時代の張仲景の著書と言われる「傷寒論」「金匱要略」の中にある本剤の薬効：「口燥渴し、心煩し、背微寒す」や「渴して水を飲まんと欲し、口乾舌燥く」に着目したという。白虎湯は実証に対する方剤であるが、白虎加人参湯は中虚証にも適応があり、高齢者の口渴に使いやすいと考え、自覚的な口渴感のみの観察にとどまらず、客観的指標として唾液分泌量をガム試験を用いて測定した。その結果、投与前にガム試験10 ml以下の例が女性12例、男性4例、合計16例であったが、投与後に7例、2例、9例と減少した。男性群は平均12.10から16.70 mlと増加したが、推計学的有意には至らなかった。しかし、女性群は10.05から13.35 mlに増加、全体30例では10.73から14.47 mlと増加し、推計学的にも有意な

改善であった。口渴感も女性群、男性群、全体といずれも有意に改善を認め、女性の著効例では唾液分泌量も増加した。なお、ガム試験と口渴感とはほぼ平行していたが、不一致例もみられた。これは口渴が唾液分泌の低下によるものでなく、高血糖や高浸透圧による口渴感に加わり、本剤の血糖効果作用も影響していると考えられる。西洋医学の去痰剤、methylcysteineやethylcysteineはkininaseを抑制したり、SH基の作用で唾液の粘稠度を低下させる⁴⁾。これらはシェーグレン症候群の乾燥症状に使用されるがその効果は十分ではない。大野ら⁵⁾は麦門冬湯で有効性を報告しているが、私共は白虎加人参湯でのガム試験の増加作用よりシェーグレン症候群の患者にも適応があると考える。本剤の構成生薬は石膏、知母、甘草、人参、粳米の5種で、いずれにも止渴作用が存在する。清熱瀉下剤の白虎湯、白虎加人参湯、竹葉石膏湯、梔子豉湯、滋潤剤の麦門湯、五苓散、滋陰降火湯、六味地黄丸などは乾燥症状に適応するものと思われる。

以上、白虎加人参湯は種々の要因による口渴や口腔乾燥症に使用され得る方剤である。

文献

- 1) 鹿井博文ら：口渴に対する白虎加人参湯の使用経験。診療と新薬 22(2), 217-218, 1981.
- 2) 山田泰司ら：向精神薬による口渴患者に対する白虎加人参湯の使用経験。和漢医薬学会誌 4, 260-261, 1987.
- 3) 成田洋夫：向精神薬による口渴に対する白虎加人参湯の効果。TSUMURA MEDICAL INFORMATION 疾患別シリーズ, No.69 (第2回中国漢方医薬シンポジウム), 1987.
- 4) 大野修嗣ら：シェーグレン症候群に対する麦門冬湯の東洋医学的検討。和漢医薬学会誌 3, 422-423, 1986.
- 5) 山内康平：シェーグレン症候群に対する和漢薬治療。現代東洋医学 7(1), 96-99, 1986.